



近畿 4 支部新春合同例会開催のご案内

講 師：岐阜県立東濃実業高校ビジネス情報科の学生さんと指導教諭の久保利光先生
(猫の司書さん：U-20 プログラミング・コンテスト最優秀賞)

テーマ：未定

日 時：2008 年 2 月 2 日 (土) 14:00～16:00 (13:45～受付開始)

場 所：キャンパスプラザ京都

アクセス：<http://www.consortium.or.jp/campusplaza/access.html>

主 催：大学図書館問題研究会 京都支部

参加費：無料

申込方法：当日参加も可能ですが、できましたら 1 月 31 日 (木) までに、次のいずれかの方法でお申込ください。

- ・関西 4 支部新春合同例会申込フォームで申し込む。

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

- ・支部委員会 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp) 宛に

(1) お名前、(2) ご所属、(3) 大図研の会員であるか否か、

(4) 懇親会に参加するか否か、(5) E-mail を知らせる。

- ・京都大学文学研究科図書館 渡邊伸彦 (FAX: 075-761-0692) 宛に

(1) お名前、(2) ご所属、(3) 大図研の会員であるか否か、

(4) 懇親会に参加するか否かを知らせる。

ご不明な点などございましたら、京都支部 支部委員会 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp) までお問い合わせください。

[目 次]

近畿 4 支部新春合同例会	…	1
大図研京都連続セミナー「知の変容と大学図書館」	…	2
第 3 回「目録サービスの進むべき道」参加報告	…	2
大図研京都連続セミナー「知の変容と大学図書館」	…	3
第 4 回「ライブラリアン・セッション」参加報告	…	3
続京大図書館こぼれ話 第十三回	…	4
大図研京都数珠つなぎ	…	6
大学図書館問題研究会忘年会開催のお知らせ	…	8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

大図研京都連続セミナー「知の変容と大学図書館」 第3回「目録サービスの進むべき道」参加報告

兵頭 尚恵

9月16日、標記のセミナーに参加しました。図書館で働いて10年以上になりますが、目録の経験はあまりなく、「目録」に対して、苦手意識を持ったまま、ずっときてしまいました。今も、目録をずっととらないと、またすっかり忘れてしまうという危機感(?)から、時々、遡及入力をしてはいますが、内心は恐る恐る・・・という感じです。

そんな自分が何故、標記のセミナーに参加したのかと言いますと、ひとえに講師が渡邊隆弘先生だったから、でして・・・。渡邊さんが神戸大学にお勤めされていたときには、大変お世話になり、また同じ系の部下として、ご迷惑も多々かけました。そんなわけで、目録には疎いくせに、ぶらぶらと出かけていってしまいました。ですので、この報告文も、とても拙いもので恐縮ですが、どうぞご勘弁ください。以下、講演レジメの見出しに沿って、報告や感想等を述べたいと思います。

1. いま、目録の置かれている状況

大きな曲がり角にある現状を概観。本来安定的に機能していたものが、インターネット時代の急激な変化に柔軟に対応出来ていない。Google、Amazonに情報検索の主導権を握られてしまっている。

2. 「図書館目録の危機」論議

中でも「研究(学術)図書館目録」の危機について。相次いで報告書等が出されているが、論者の危機感も一様ではなく、論争はかつてない高まりとなっている。結論はまだ出ておらず、いろいろな意見が並んでいる段階。

3. OPAC機能改善の動向

現状としては、機能の改善は進んでいない。20年も前から次世代OPACのアイデアは出ているのに、未だに実装されておらず、それらの多くが皮肉にもWeb検索エンジン上で実装されている。続いて、ようやく始まった改善の試みが紹介された。

■事例紹介：情報の視覚化、「レバンスランキング」、コメント、レビュー等もあるが、実際の利用価値は不明。一方で、現在構築されているデータ資源を最大限に生かすという観点から、絞込みの手段として「件名標目」を利用する、或いは「FRBRization」の考えからOPAC表示を再構築する試み。その他、オープン化、モジュール化など。

4. 目録規則再構築の動向

「改訂」は限界、抜本的な「再構築」の段階へ。「FRBR」という概念モデルの確立。このモデルが今後の目録規則設計やOPACの基礎になるであろう。「ICP(国際目録原則)」=パリ原則に代わる基本原則(2008年完成予定)、AACR(英米目録規則)→RDA(Resource Description and Access)。「目録規則」とはもう呼ばない。

5. 目録業務のゆくすえ

世界に共通してあるのは、「コスト削減」と「品質向上」という大きな課題。アメリカ等では、カタログの意識改革(オリジナル作成にこだわらず、コピーカタログングをもっと徹底させる)によるコスト削減が必要と。日本とは「伝統」に対する意識がかなり異なるよう。

(以下は講師の私見、とのことですが)

NACIS-CAT は大きな成功を取めたシステムだが、制度疲労も見え始めている。データ品質の問題。「重複書誌」と「レコード調整」、現行規則からの違反ばかりがクローズアップされているが、それだけが問題か？

例えば、「著者名典拠」:「アクセスポイント」という視点から考えると、これを必須入力としていない現状はいかがなものか。また、主題分析(件名)等も満足にはなされていない。さらには、共同分担方式は、最良の策か？データの品質を考えるならば、少数精鋭の専門担当者に書誌データ入力をまかせるという道もあるのでは・・・。

質疑応答では、図書館職員、システム開発側、データ構築側等、参加者それぞれの立場から、するどい質問がありました。講師の側からは、OPAC の見せ方、機能の充実はもちろん大切だが、データの品質が伴わなければせっかくの機能も役に立たない。AL リンク、主題分析、ある程度コストをかけてでも整備する、という心がけも必要ではないか。という意見が述べられ、最後に、このような目録の論議が行われている場に、図書館の現場の人が少ない、もっと現場で議論し、その意見を届けることが必要だ、というお話がありました。

以下は個人的な感想になりますが、今回のお話は、長年安定的に機能してきた目録というシステムが、社会の急激な変化も伴って大きな岐路にあるという現状を個々の図書館員もしっかりと把握し、「進むべき道」について自分なりのビジョンを持つべきときである、という問題提起をされたのだと思いました。常日頃、重複書誌や記述の誤りばかり気にして、目録に対して腰が引けていた私ですが、今回お話を伺って、利用者の役に立つ目録を作るとはどういうことなのか、1つ1つの語句を、何のために入力しているのか、という視点が全く欠けていたことに気づきました。これからは、今までとは少し違う心がけで、目録に取り組みそうな気がします。

最後になりましたが、有意義なセミナーに参加する機会を与えていただき、どうもありがとうございました。

ひょうどう なおえ(神戸大学経済経営研究所図書館)

大図研京都連続セミナー「知の変容と大学図書館」 第4回「ライブラリアン・セッション」参加報告

北岡 伸也

今回、大学図書館問題研究会京都支部主催の連続セミナー「知の変容と大学図書館」第4回に参加させていただきました。わたしは公共図書館という館種が異なる立場ではありますが、以前より大学図書館の活動などにも関心がありました。

福井氏の「いま求められる図書館員」では、ホテルなどに導入されているコンシェルジュを図書館へも採り入れるという画期的な試みが紹介され今後、求められる図書館員の質の高さを感じました。土出氏の「闘病記-資料群の性格と愛媛大学における事例-」では、やや利用し難い闘病記という資料を大学一丸となって受入、利用に供している事例をうかがえました。坂本氏の「私たちが図書館員でなくなる時」では、図書館における聖書とでもいふべき「図書館の自由」をあらためて認識させられる内容でありました。呑海氏の「図書館員養成におけるメン

ター制度」では、イギリスで採り入れられているメンター(mentor)という優れた指導者による図書館員養成のあり方が詳細に述べられていました。大網氏の「大図研京都支部 Web サイトの紹介」は、大学図書館問題研究会京都支部の情報発信のコンセプトや活動の様子がうかがえました。

今回、初めて参加させていただきましたが、館種が違う立場なので変革していく大学図書館の様々な試みを知り、それぞれの図書館員の様々な研究活動をうかがい知る大変よい機会となりました。少子化により、各大学においても学生獲得に様々な方策を試行しているのを耳にします。図書館の世界においては、資料のデジタル化、他大学や他機関とのネットワーク化、インターネットの発展による学术论文のウェブ上での閲覧というオープンアクセスと急激に変化を続けています。

文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会、学術情報基盤作業部会が2006年3月にまとめた「学術情報基盤の今後の在り方について(報告)」の中で、大学図書館を考える基本的な視点として4点挙げています。大学図書館の位置づけとして学術情報基盤である、大学図書館の基本的な役割として学生の自主学習を支援する、電子情報とインターネットの普及による各種情報と紙媒体を有機的に結びつけた「ハイブリッド・ライブラリー」の実現、大学図書館活動における新たな役割、という4点であります。

今後、大学図書館の果たす役割は大きいと思います。そのような状況の中で大学図書館問題研究会の活動もまた、重要なものとなりうると思います。今後の大学図書館問題研究会のさらなる発展を祈りつつ、むすびにかえさせていただきます。

きたおか しんや(京都府立図書館)

続京大図書館史こぼれ話 第十三回

京大草創期、図書館を巡って起こった対立事件 その10

廣庭 基介

森は明治14年9月には新潟師範学校長に就任しました。次いで明治19年、腎臓病に罹り、依願免官。明治20年4月より司法省参事官、同年12月には同省書記官に転じ、明治23年11月には名古屋控訴院書記長に補されました。次いで明治25年1月には大審院書記長に抜擢され、明治31年4月まで司法省に10年余り勤務した後、同年同月菊池文部次官の招請に応じ、再び文部省に帰り、同時に京都帝国大学創立に当たり、その書記官に任じられました。さらに、同年5月からは高等官3等に陞叙され、京大の医科大学と法科大学の創立等に尽力します。

明治36年4月には書記官在任のまま、京大医科大学の分校としての福岡医科大学の創設事務を委任されました。さらに明治37年9月、京大学生監に併任され同43年10月まで継続して勤務しております。その間、九州帝国大学の濫觴となる福岡医科大学を創設するために尽力し、福岡県から福岡県立病院と、金30万円、福岡市の23万坪の敷地が提供される条件をもって、大学となることが承認されました。これらの事業は、京大の木下総長からの委嘱を受けて、京大書記官に在任のまま赴任したのであって、福岡医科大学の初代学長になる大森治豊博士と共に、県立組織を官立組織に転換する事務に尽力しました。

加えて森は、九州に官立の工科大学を創設する事業にも携わり、それを実現させることが出来ました。そして明治44年3月、京都大学官制の変更によって、書記官が廃官となり、高等官1級俸、正四位に叙されて退官したのです。しかし、退官後も九州帝国大学医科大学附属病院事務監を嘱託され、明治45年3月まで勤務を続けています。1927年(昭和2年)5月、77歳にて死去しました。

墓は左京区の府立大学と府立植物園グラウンドの間にある旧下鴨村惣墓にあります。この墓地には他の京大教授であった方々も眠っておられますので、本稿の主題とは離れますが、この墓地の奇態な現代史に触れさせて頂きます。1977年頃、寺町鞍馬口下ルの浄土宗光明寺の森弁有という住職が、下鴨住人に無断で大乗寺と称する寺を墓地の入口に建ててしまい、墓地管理料を徴収し始めたので、当時京大法学部教授で元図書館長でもあった田中周友先生を中心に、下鴨住民が告訴しましたが、「墓地・埋葬に関する法律」に基づく管理者を置いていなかったのを逆手にとって、自分が管理者になってしまいました。この墓地には当然のこと、佛教、神道、キリスト教、天理教、無神論者など、諸宗教の住民の墓があり、現に市村家、森家はキリスト教であり、筆者の家は神道ですから、墓参りの度に大乗寺の仏像の前を通らなくてはならず、今でも釈然としない住民が多いのです。

本墓地に眠っている京大関係者には、本稿でも触れた法学部教授織田萬、その子息で文学部教授であった織田武雄、法学部教授市村光恵、教育学部教授鱒坂二夫、今年初頭に亡くなられた文学部教授安田章などの諸先生があります。また、森春吉書記官も市村家の隣に眠っております。

ところで、法科五教授の「批判書」の第5項では、森が、総長の委嘱に応じて事務を執るほどの能力がないので、速やかに誡首して、もっと適当な人材を捜してこい、と弾劾していましたが、上記・森の京大へ来る前の履歴と、京大を定年退職してからの履歴を見る限り、この当時の文部官僚として、これくらい立派な経歴をもった人物は、そう簡単に見付けることは出来なかったのではないかと、と思いますが、皆様はどう思われるでしょうか？仕事が出来たからこそ、定年後も九州大学医学部附属病院の設立事業に呼ばれたものと思います。

筆者が、森書記官の履歴を知った訳をお話ししておきます。筆者は1932年に左京区下鴨神社の西側の松原町北端の家で生まれ、1961年まで其処で暮らしていました。松原町北端は、西林町の南端と道を隔てて向かい合っています。筆者の家の向かいに西林町の市村光恵法科大学教授の家があり、同先生の孫の鉄雄、真、兄弟と筆者は同じ幼稚園・小学校に誘い合っ通っていました。市村先生の妻・春子は森書記官の妹でした。市村家も森家も土佐の高知出身者でした。筆者の友達市村君兄弟にとって、森書記官は大伯父に当たる訳です。筆者はこの真君から森書記官の履歴書を見せて貰った次第です。

前記五教授が森書記官を弾劾した当時、市村光恵先生は同じ法科大学の助教授でありましたから、自分の先任教官である五教授が、「無能につき罷免せよ」と弾劾している森書記官の妹であっても、妹は飽くまでも一個の女性であって、書記官そのものではない、とやかく云われる筋合いはないと考えて結婚を断行し、一方、五教授は五教授で、森書記官と妹は別人であるから文句は云わない、という態度を執ったようなのです。

事実、市村光恵先生はこの7年後の明治42年10月には34歳で教授に昇任しています。当時の法科の教授昇任の年令は、神戸正雄が30歳、河上肇が36歳、佐々木惣一が34歳、末川博が33歳でしたから、市村の昇任が遅かったとは云えません。

あしがき

大変、長々と京大草創期図書館を市民に公開しようとした木下広次初代総長及び島文次郎初代附属図書館長などが、2007年の現在ならば、世間一般は勿論のこと、京大全学の大多数の教職員に受け入れられたであろうに、明治30年代当時にあつては、一部の教官から賛成されなかった上に、そのような館長の首を切れと要求する人々があつたという事実を明らかにしてきました。また、その人々が、京大事務職員の元締めである書記官の更迭や、理工科大学学長の間責を要求したことも見て来ました。これを見れば、草創期の京大が、決して一つの波風もなく、順風満帆の船出をしたとは云えないことが明らかになってきたと思います。総長による図書館の市民公開計画など、現代の私達図書館員は、願ってもない朗報であり、正論であると思いますが、明治時代においては、エリート集団においても決して賛成する人々ばかりではなかったことが分かりました。むしろ、学術エリートであるがゆえに、自らのレーゾンデートルの源泉となる図書の扱いに厳しかったのかもしれない。

因みに、木下総長が1910年(明治43年)8月に59歳で逝去した4カ月後の同年12月、彼の銅像を建立する委員会が発足し、学内外に募金を呼びかけた際、例えば図書館長の島文次郎は30円、文科大学の内藤湖南は20円、上田敏と新村出は10円、西田幾太郎と成瀬無極、藤井乙男は3円、法科大学の織田萬は30円、井上密と仁保亀松が15円、市村光恵、戸田海市、佐々木惣一が10円という醸金額であつた中で、岡松参太郎は何と200円という、高額第2位の醸金をしたのでした。第1位は210円の愛久沢直哉という東大卒の植民地経営者、次が200円醸金者2名で、岡松以外の一人は東京市長や満鉄総裁、国鉄総裁を歴任した中村是公でした。岡松の醸金額200円は何を物語るのでしょうか。現在に換算すると約200万円以上となります。因みに、岡松の父の甕谷と、木下の父・犀潭は、いずれも肥後熊本細川藩の学者同士で、岡松参太郎と木下広次はお互いの親の現状や健康について、季節の挨拶を交わしている書簡も京大文書館に残されていることを付け加えて置きます。

(おわり)

ひろにわ もとすけ (元京大図書館員)

大図研京都数珠つなぎ

コミュニケーション：ひと対ひと

辰野 直子

最近、個人的に考えることの多い「コミュニケーション」について、経験を交えながら、思いつくままに書いてみたいと思う。

今年、会報『大学の図書館』9月号に編集担当のひとりとして関わらせて頂き「図書館と利用者とのコミュニケーション」という特集を組んだ。そこで、図書館職員や利用者等の立場から5名の方に原稿をお寄せ頂いた。既にお読みになった方もおられると思うが、どの方も共通して、例えば図書館職員と利用者といった「ひと対ひと」の関係が大切とご自身の体験から書かれていたのが印象的だった。

この秋、アメリカはハーバード大学のローライブラリーを見学させて頂いたときのこと。司書の方に館内を案内して頂いたのだが、その時たまたまひとりの学生とすれ違った。

学生：この前は〇〇について教えて頂いてすごく助かりました。ありがとうございました。

今度△△に関する文献の調べ方を教えてほしいんですけど。

司書：明日の□時頃だったら空いているから部屋にどうぞ。

すれ違いざまほんの1分程のやりとりだったが、ごく自然になされたのが強く印象に残った。(もちろん、アメリカのような図書館制度にするべきとかいうことではなく、単純に、かつこいい、羨ましいと思っている自分がいた、というエピソード。)

図書館で働き始めてやがて5年が過ぎようとしている。その間、様々な研修を受講したり、シンポジウムに参加させて頂いたりした。研修で技術的なことを習得すること、他機関の実践例を聴くことは非常に勉強になった。

最近、そのような場に参加する度に印象に残るのは、講演者の方々が口々にコミュニケーションの大切さを語ることだ。もちろん、そんな単純な表現ではないが、新しいサービスを始めるにあたり、図書館以外の事務方への説明をじゅうぶんにすること、教員からの協力をとりつけることが大切だと語られる。卑近な表現でいえば根回しということになるだろうが、これも「ひと対ひと」のコミュニケーションだと思う。

この4月に異動を経験したが、ずっと閲覧や参考調査等いわゆるサービス系の仕事に携わっている。図書館のサービスを考える時、ともすると対象を「利用者一般」と捉えてしまいがちだが、日々利用者である学生や教員と接する機会があることで、ひとくちに利用者といっても属性やニーズは多様であること、図書館と利用者といってもその関係は「ひと対ひと」なんだという、当然のことを意識する。

以前、ある教員が、本を執筆するに当たって文献を海外から取り寄せる必要があり、ILL業務担当の私が必然的にそのお手伝いをさせて頂いた。最終的に無事に本が刊行されたのだが、その謝辞に私の名前を入れて下さったと言う。もちろん、担当業務なので当然ではあるが、ひとりの利用者の役に立てたということを実感した出来事だった。

まだ図書館職員となって間もない頃、知識や経験も無い自分ができることといえば、はじめて図書館を使う利用者（最初に勤務した図書館は1回生の利用が多い図書館だった為）に図書館に対してよい印象を抱いてもらうことであつたし、そうなるようにカウンターでの対応を心掛けていた。いま、5年目にして、その頃よりは多少の知識や経験は身についたはずではある。知識や経験に少しだけ裏付けられたサービスを、図書館職員となって間もない頃の心掛けとともに提供できれば、と思う。もちろん、知識や経験はもっともっと増やしていきたいながら。

たつの なおこ (滋賀医科大学附属図書館)

数珠つなぎを書いて下さる方を募集しています。

京都支部の原稿投稿フォーム (<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>)

から投稿頂くか、支部委員会 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)宛てにお送りください。

数珠つなぎ以外の原稿についてもお気軽に投稿ください。

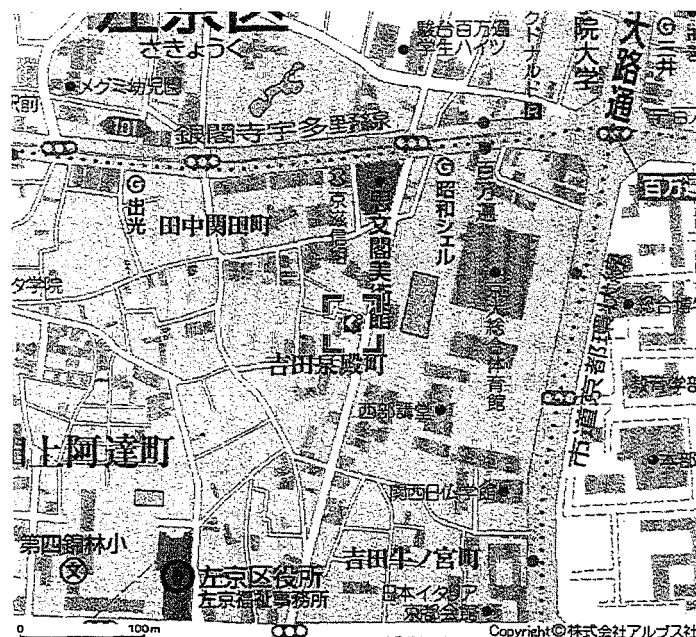
2007年 忘年会のご案内 12月21日

京都支部では2007年の忘年会を下記の通り開催します。
皆様のご参加をお待ちしております。

日時：2007年12月21日(金) 19:30～

場所：創業20年の京居酒屋 大文字
京都府京都市左京区吉田泉殿町42-3 京大プール裏鞠小路通り
<http://r.gnavi.co.jp/c178500/>
TEL：075-751-6510

(アクセス) 京阪鳴東線出町柳駅 徒歩10分



◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2007年度(大図研会計年度2007.07 - 2008.06)に入っておりますので、2007年度の会費の納入をお願い致します。また、2006年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000)です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の大綱浩一 まで。